

『遠い航跡』を読んで

石 川 禎 紀

本書を一読して受ける感銘は何よりも哲学学徒として人生にひたむきに向かいあい、よりよくあるべき人生を追い求める著者の誠実な生き方そのものにある。ややもすると哲学という語のもつ響きには日常から遊離した、非日常的で難解な学問とするきらいがある。そうした哲学の語から受けやすい負の印象を抱かせないのは、哲学を根底にした深い思索による著者独自の世界が構築されているからであろう。

「人は悩みつつ、迷いつつ生きている」がゆえに「練り直しながら生きてゆけばよい」という語りかけは、高い所にかまえての説教とは縁遠く、じつに心やさしい。己の歩みをふりかえりつつ自分との対話をかみしめているようなふうでもある。いうまでもなく、人はひとりでは生きていけない。さまざまな場でいろいろな人々と出会う。いま著者の語るところをまとめてみると、次のようになる。

「人生という旅は他者との出会いであり、必ず別れなければならぬ、人生の条理であり不条理でもある。偶然であって偶然ではない。必然の契機を蔵しためぐりあいであって、ただのゆきちがいではなく、他者が自己の中に生きつづけることであり、めぐりあいによる覚醒となる。」

この指摘に、「めぐりあい」（「出会い」、「邂逅」）の語に新たな意味を付与されて心地よい衝撃すらおぼえるのではあるまいか。

こうした哲学への巧みないざないから、実存哲学へと案内される。「生きている一人一人は、だれとも代わることでできない、比類のない存在という意味で絶対的存在」と規定され、この認識の上に立って、子どもの内なる潜在力を引っ張り出すことが大人に問われる人間力であり、そういうさまざまな命を引きだす重い営みを担うのが教育である、と呼びかける。ひとりひとり個性の違う子どもをいかに把握し理解し伸張させ

ていくか、教師の人間としての実力が問われる。ともすればできる子への関心と期待に傾きがちで、できない子への配慮と指導がふゆきとどきでなかったか。胸に手をあてるとき苦い悔恨とともに忸怩たる思いにとられるのは筆者ひとりではないだろう。

著者は「子ども視点」の観点から二つの挿話をあげる。子どもが遊びで転落した穴を「深い穴」とせずに「高い穴」と言って助けを求めに来た子ども仲間の話。庭先のインコの所在を幼稚園児に教えられ、子どもの背丈にかがんでやっと見だし、さらにその目線で室内の数々を新たにとらえ直した母親の話。これらの具体的な引用はわかりやすく巧みで、日頃の博覧による資料収集など、著者の旺盛な好奇心を物語るものであって、その若々しい柔軟な精神には瞠目するばかりである。

そのような若々しい柔軟な精神があざやかにうかがえるのは母校における記念講演「少年たちの星夜」であろう。転勤内示の折に別れを惜しむ少女に「進む者は別れねばならぬ…」(阿部次郎)という思いをこめた色紙を贈る場面も、不断から生徒たちとの相互信頼に基づく心の交流があればこそであって、この一事だけはふれておかねばならない。さて、講演に先立ち生徒たち数名から考えていること・聴きたいことを受ける用意周到さはさることながら、その問いかけにやさしく寄り添い、問題を共有しともに解決に向かおうとする真摯な態度が歓迎されたことだろう。生徒たちの「人のためになる最も大事な心がけ」「高校生にとって一番大切なものがなぜ勉強か」「進路を決めるときに大切なことは」といった素朴にして根本的な質問に、自分の来し方を語り、恩師を語り、戦時下の生死隣り合わせながらの先輩たちの知への欲求と豊かな感性を語るとき、生徒たちは胸の高まりをもって明日への新たな出発を決意できたのではなかったろうか。

著者の人生観の大きな部分を強く太く貫いているものとして戦争への痛切な思いをくみとることができる。昭和18年の神宮外苑での学徒出陣雨中行進、教師と生徒の工場先での数々の苦難、戦没学徒の遺書、奇跡の生還をとげた学徒の文章などを通して声荒立てることなく淡々と語る。前途有為な若者たちの薄倖の生涯への鎮魂の気持ちは「今日の平和は、先の戦争で失われた多くの命の上に成り立っている」と語るところからでも明らかであるし、おそらく著者が5年早く生まれていたら戦場

『遠い航跡』を読んで

へかりだされて生還期しがたい運命であったはずなのに、たまたま逃れえた僥倖をかみしめながら、この戦争体験こそは伝えるべき責務と考えているにちがいない。「風立ちぬ。いざ生きめやも。六十余年前、戦陣に散った若者たち」の悲運にわが身をかさねあわせ、悲惨な戦争があつてはならないという非戦・不戦への静かにして確たる信念をよみとらねばならないと思う。圧巻は知覧特攻平和会館のトイレにおいて著者の遭遇した見学者の1人の慟哭にある。生き残った元特攻隊員である東京都教育委員の、身の置きどころのない悲しみの涙と声に著者も絶句する悲痛きわまりない場面は重い感動でうちのめされる。俳句に造詣深い著者は俳人でもある恩師西村先生の教え子が戦場におもむく哀切な別れの場面の句、俳人飯田蛇笏が二子のあいつぐ戦死の報を知らされたときの父としての耐えた心情の句を紹介しているが、著者の豊かな感性に支えられたこまやかな鑑賞は鮮やかな印象を残す。

「遠い航跡」の題名は著者の人生の旅において忘れえぬ人々との出会いをふりかえるとき、青い海原の一条の波の跡のごとく胸底に想起されるところに由来する。それはまた恩師西村先生を偲ぶ会でも謝恩の念あつく懐旧の情を披歴する巻末でも話されている。ここに一つつけ加えるならば、東支那海に浮かぶ離島からただ一人鹿児島一中に入学した少年、すなわち「入学す白風呂敷の一中に」の句に詠まれた生徒に自分をかさね、望郷の念やみがたい遥かな日を想起する著者の姿を思い浮かべずにはいられない。

(元茨城県立水戸第二高等学校教頭)